

現代国際学部における CELP と Core English の 位置づけと授業について

Goals and Lessons of CELP and Core English in the School of Contemporary International Studies

佐藤雄大
Takehiro SATO

1. はじめに

現代国際学部は外国語学部、世界共生学部、世界教養学部とは異なり、言語が主となる「現代英語学科」、ビジネスが主となる「グローバルビジネス学科」、国際的な教養教育が主なる「国際教養学科」という異なった領域の学科で構成されている。そのため学部全体として3つの異なる学科の学生に身につけさせたい基礎的な力も他学部とは趣が異なってくることになる。現代英語学科は専門科目になってもアカデミックな英語文献を読むことが求められるが、グローバルビジネス学科と国際教養学科においては現代のメディアを中心とした時事英語の読解・聴解が中心で、産出に関しても平易でわかりやすいものが求められることが多いことになる。

このような多様な学科が集まった現代国際学部の英語教育をカリキュラムに位置づけるということで本学部の専修科目として1年生～2年生で下記のような学部英語授業を開講している（各授業学科別で編成している）。

【Basic English】

Reading for Understanding I～IV（1年生～2年生）

Writing for Communication I～IV（1年生～2年生）

Oral Communication Strategies I・II (2年生)

Remedial English A/B

TOEFL (Preparatory/Advanced) I/II

TOEIC (Preparatory/Advanced) I/II

【Applied English】

Advanced Grammar I/II

Listening for Specific Purposes (Intermediate/Advanced) A/B

Reading for Specific Purposes (Intermediate/Advanced) A/B

Writing for Specific Purposes (Intermediate/Advanced) I/II

Speaking for Specific Purposes (Intermediate/Advanced) A/B

この学部の専修科目とは別に名古屋外国語大学の全学共通の英語プログラム「英語基幹プログラム (Cross-departmental English Language Program : 以下 CELP)」があり、現代国際学部においても下記の授業を開講している。

「Power-up Tutorial 1・2」

「Listening Comprehension 1・2」

「TTI (TOEFL・TOEIC・IELTS)」

「Core English」(詳細は後述)

現在の現代国際学部のカリキュラムは2016年度入学生までを対象としていたカリキュラムを改編しCELPを融合させたカリキュラムとなっている。その改編の際、それまですでに開講されていて現在でも開講している Basic English・Applied English 科目群とどのように整合性を保ち、学部の英語教育目標に学部生の英語力を高めていくかということを念頭に置いてカリキュラムを改編した。以下に改編のポイント述べたい。

2. CELPの特徴

改編に際して重要視したことは、CELPと学部専修科目の英語授業との有

機能的な融合であった。学生にとっては両方とも重要な英語の授業であり、必要かつ有効に学生の英語習熟度向上につながらなければならない。また前述したように現代国際学部が持つ時事英語を中心とした英語力の涵養も当然期待される場所である。

CELPは全学共通の英語プログラムであり、その意味するところは名古屋外国語大学に入学した学生全員が少なくとも身につけてほしい英語力がここで教授されるということであり、その点少人数（学生4人に対して英語母語話者チューター1人）の構成による英会話訓練のPUTでは大学入学までに訓練量の少ないオーラルコミュニケーションに関して心理的障壁を軽減することに目的があったり、大学生以上の英語習熟度評価の外部試験で定評のあるTOEFL、TOEIC、IELTSのエッセンスを半期で教授するTTIでは、幅広く英語力を証明しなければならない現状で外国語大学では是非とも必要とされる科目となっている。

一方Listening Comprehensionに関しては現在外国語学部、世界共生学部では*Listen to Me*を利用してCALL（Computer-assisted language learning）でリスニング強化を行っているが、PC利用・設備など総合的に考慮して現時点で現代国際学部では*Listen to Me*を利用したCALL授業は行っていない。CALLはただ学習者がPCで展開されるプログラムを個人で取り組む場合、それを授業内で行っても授業として成立しない。またCALLを教員など他者がScaffolding（足場かけ）（Wood, Brunner, & Ross, 1976）という役割を果たすことでその成果を高めることができるし、現在のITALLセンターではそういった実践が行われているが、そうした支援体制を本学部では現時点で構築できておらず、CALL導入までにはいたっていない（これがこれからの本学部共通英語プログラムの課題でもあるといえる）。そのためCELPの一つであるListening Comprehensionを本学部では、入学前英語学習から大学英語・留学準備のためのブリッジ的役割をもつリスニング強化プログラムとして位置づけている。またTTIとListening Comprehensionは同じ語学クラスで受講するようになっており、クラスサイズとしては30名～45名ぐらいのサイズとなっている。

このような現代国際学部における CELP の授業の位置づけでもっともその接合に難しさが出てきたのが Core English であった。Core English は外国語学部で先行して実施されていた授業で、週2回の授業を英語母語話者教員が担当する形態の授業で、その理念としては授業を目標言語で実施することで学習者は授業内容を目標言語で聞く、話すということになる。この方式は、CLED の HP で「内容基盤言語教育 (content-based language teaching)」と言及されており、これは近年研究実践が進んでいる CLIL (Content and Language Integrated Learning) 形式と言ってもいいだろう。一方、文法と語彙・発音も学習項目としては挙げられていて同 HP ではこれを「言語基盤の (言語) 教育」(language-based (language) teaching)」と説明している。これは第二言語習得研究 (second language acquisition research) 分野でも研究されてきた Focus on Form の理論・実践が背後にあると考えていいだろう (Long, 1983)。

こうした理念を実現するために英語母語話者教員でチームを作り、教材研究を背景として外国語学部で Core English が実施運用され、成果を上げていたことから全学的な英語カリキュラム CELP に導入されることとなった。そしてこの Core English が現在のカリキュラムにおいて現代国際学部導入されることとなったということになる。その際学部内で考えられたことはこの理念を本学部の学部英語教育においてどのように実現するかということだった。

3. 現代国際学部のカリキュラム改編

現代国際学部は2004年にそれまでの国際経営学部を再編する形で現代英語学科と国際ビジネス学科の2学科体制で新たに発足した。さらに2013年には国際教養学科が新設され、現在の3学科体制となり現在に至っている。現代国際学部の英語教育は本稿のはじめに書いたようにどの学科においても時事英語の必要性が基盤にあり、外国語学部とはその目標が異なっているため当初から各学部独自の英語教育を推進してきた。2013年からは現在のカリキュラムでも継続している必修英語授業として「基礎英語」の4科目が開講された。

【旧カリキュラム：基礎英語】

Reading for Understanding I～IV（1年生～2年生）

Writing for Communication I～IV（1年生～2年生）

Power-up Tutorial 1・2（1年生）

Oral Communication Strategies I・II（2年生）

jそして学生が各自のニーズに基づいて1年生～2年生にかけて4技能から選択できる選択必修の英語科目として「応用英語」（16単位の履修が必要）が開講された。

【旧カリキュラム：応用英語】

College Grammar I/II（1年生）

Advanced Grammar I/II（2年生）

Listening for Specific Purposes (Basic/Intermediate/Advanced) A/B（1年生～2年生）

Reading for Specific Purposes (Basic/Intermediate/Advanced) A/B（1年生～2年生）

Writing for Specific Purposes (Basic/Intermediate/Advanced) I/II（1年生～2年生）

Speaking for Specific Purposes (Basic/Intermediate/Advanced) A/B（1年生～2年生）

これら2013年度からのカリキュラムで開講された授業群もそれまでの学部共通の英語プログラムのコンテンツや教員を再編し、内容的に維持するべき点は維持し、修正・追加する点を改良したものであった。

2013年度から運用されたこれらの科目群に CELP の科目群が現代国際学部に導入され現在の科目となる時に先に触れた Listening Comprehension と Core English をどのように位置づけるかの問題が浮上した。Listening Comprehension については前述したように外国学部とは異なる方法で実施し、CALL 実施についてはこれからの課題としている。もう一つの Core English についてはすでに実施されていた外国語学部における Core English の理念が全学的な CELP にも引き継がれていることから、それをどのように現代国際学

部で実現させていくかということが課題となった。

CELPを導入する前の現代国際学部の英語リソースを活用して、なおかつCore Englishの理念を実現する方法として現代国際学部の英語チームでは2013年から始まった「応用英語」の1年生開講科目である「Basic」コースと「Intermediate」コースをCore English科目として再編することとした。それは以下のような改編となった。

College Grammar I/II → Grammar for Core English I/II

Listening for Specific Purposes (Basic/Intermediate) A/B

→ Listening for Core English (Basic/Intermediate) A/B

Reading for Specific Purposes (Basic/Intermediate) A/B

→ Reading for Core English (Basic/Intermediate) A/B

Writing for Specific Purposes (Basic/Intermediate) I/II

→ Writing for Core English (Basic/Intermediate) I/II

Speaking for Specific Purposes (Basic/Intermediate) A/B

→ Speaking for Core English (Basic/Intermediate) A/B

このような科目配置で実現できることは外国語学部のCore Englishでは4技能の要素が一つの授業として統合されていたが、現代国際学部でそれを技能として分離させて、1期について2科目（2単位）、1年間を通じて4科目（4単位）を修得するという形態にしたことである（外国語学部のCore Englishも同様に年間8単位）。外国語学部のCore Englishのように統合された形には利点があるが、現代国際学部の選択科目方式にはやはり学生が自身で選択することによって動機づけが明確になる利点があり、現代国際学部としてはそのように学生が自ら選ぶということを学部の教育方針として残しておきたい意向があったため、旧カリキュラムの「応用英語」と同じような形態を残した。また、学部の英語プログラムでBasic English、Applied Englishで基礎的・発展的な英語教育が確保されているため、学生の意志にもとづいた英語の選択科

目を残しておくことは意味ある配置だともいえる。さらに「応用英語」で編成されたコンテンツや教員配置を大きく変更することなく全学英語プログラムに移行できる点でも利点があった。

このようにして現代国際学部の学部英語プログラムは全学共通英語プログラムのCELPを基盤としながら、学部独自で展開しているBasic English、Applied Englishで学部3学科の学生の1、2年の間で3年次以降の各学科の専門科目に必要な英語力を涵養していくことを目的としている。また各学科とも2年次2期出発、特に3年次1期出発の交換留学へ行く学生が多いため、留学先のESLや学部授業に対する基礎作りもCELP・学部専修科目での英語授業でおこなっているということになる。

現代国際学部ではこの他にもTOEFL、TOEIC準備のための授業として下記のものを開講している。

TOEFL (Preparatory/Advanced)

TOEIC (Preparatory/Advanced)

そして高校英語から大学英語へのブリッジに焦点を当てたRemedial Englishという科目も開講し、必修授業に加えどの習熟度の学生も1、2年の間で一定の英語力を身につけることができるようにカリキュラムを構成している。

こうした学部の英語プログラムを背景にCELPのCore English科目群がある。次にこうした学部カリキュラムに位置づけられたCore Englishがどのように構成され、授業の実際を紹介することとしたい。

4. 現代国際学部におけるCore Englishの役割

以上見てきたようにCELP科目のCore Englishは現代国際学部の英語教育プログラムで英語力強化ということで重要な役割を果たしている。学部専修科目のBasic English、Applied Englishとの有機的な連携を考えて、4技能の基礎力の増強を目的としている。

4.1 Speaking for Core English

オーラルコミュニケーションの一つであるスピーキングにおいて日常会話とアカデミックやフォーマルな場面のスピーキングがあるが、大学1年生でのスピーキングでは日常生活場面での具体的なオーラルコミュニケーションとしてスピーキング力の向上に努める。その場合、産出である話すことに必要な具体的場面に適した語彙・言い回しを中心に訓練することが多くなっている。

4.2 Listening for Core English

リスニングもスピーキング同様オーラルコミュニケーションとして日常会話とアカデミックやフォーマルな場面でのリスニングが想定される。大学1年生ではスピーキング同様にまだオーラルコミュニケーションに慣れていない状況を想定して、日常的な具体的場面でのリスニングに焦点を当てる。産出のスピーキングと異なり予測文法 (expectancy grammar; Oller, 1983) が重要になり、すべて聞き取るのではなく聞き取りにポイントがあることも授業の中で扱っている。

4.3 Reading for Core English

リーディングは学生が入学前最も学習に慣れた分野と想定している。そのため2年生以降により学問的・専門的な英文読解を進めていけるため、本学部の特色である時事英語に焦点を当てながら英文を読解する訓練を行っていく。具体的には英字新聞のような報道で使われる英文を対象として、精読する部分、情報を得るためのスキミングなど様々なリーディングストラテジーを徐々に身につけていくことを目標とする。またFocus on Formを意識しながら、基本的な英文法などの再確認も必要だと考えられている。

4.4 Writing for Core English

ライティングは学生にとって最も苦手とする分野だと想定される。高校卒業までの英語カリキュラムが産出を重視したり、オーラルコミュニケーション

ンに移行してきているとはいえ、クラスサイズが40名を基準としているため、例え学習者が英文を書いたとしてもそれをきちんと読み、フィードバックすることはあまり多くの授業で実施されているとは想定しづらい。さらにパラグラフで内容をまとめたりすることはほとんど無いと想定しなければならぬ。そのため2年生以上のライティング授業や2年生以降の留学に備え、ある程度のアカデミックライティングを指導できる下地作りが1年生の段階で必要だと考えている。そのためにはまず英語でライティングすることに慣れることとオーラルコミュニケーションの英語と書記英語の違いについても徐々に身につけることがこの段階で要求されることである。

4.5 Grammar for Core English

旧カリの「応用英語」にCollege Grammarがあり、現カリキュラムの2年生用に開講するApplied Englishには旧カリを引き継ぐ形でAdvanced Grammarを配置しているように英文法の理解も学部の英語教育としては重要視している。現代の英文法は江戸末期から英語を受容してきた日本の英語学の英知が体系化されており、英語を効果的に理解し、なおかつ産出へとつなげていく最良のデバイスともいえる。基本的に江川泰一郎著『英文法解説』を基準として一般的な英語を正確に把握できる力をつけることを目標としている。

以上Core Englishの各科目が持つ目標について述べてきた。もちろんもとのCore Englishが持っている統合型の指導で実現されている4技能が持つ相互性については各科目でも意識的に配慮されており、その点を意識しながら各技能について内容を深めることができるのが現代国際学部のCore Englishの特色なっているだろう。

5. Writing for Core Englishの実際

最後にCore Englishの授業の実際を紹介して、現代国際学部のCore Englishの様子をお伝えすることとしたい。

取り上げるのはWriting for Core English Iの授業である。大学での英語ライ

ティングは前述したように学生が不慣れな分野であるが、大学時代最も習熟度を上げなければならない技能でもある。そのためには様々な方法がある。例えば『英語教育学大系10巻リーディングとライティングの理論と実践』（木村・木村・氏木、2010）に詳しく様々な手法が紹介されているし、筆者が長年取り組んできている Vygotsky（1987）に基礎をおいた社会文化的アプローチ（Lantolf, 2000）を基盤とした Dialogue Journal を利用した手法もその一つであるといえる（佐藤、2014）。

Writing for Core English I は本当に入学式を終えて一週間程度から始まる授業で展開される英語ライティング授業となる。今回取り上げる授業はグローバルビジネス学科を対象とした授業であるため前半は具体的な状況の中で英文を書くことに慣れるということに重点を置き「英文メール」を書くことを指導した。

指導の手順としては以下のような手順で行った。

1. 英文メールにある形式の提示
2. 英文作成
3. 指導教員へ実際にメールを送信
4. 添削
5. 追加修正して再度メール送信
6. 添削
7. 追加修正して最終版をメール送信

英文メールにおける形式はサンプルとして以下のようなものも配付した。

【一般的な形式】

Dear Mr./Ms./Prof./Dr. Saito,

Hello/Hi/ Hope this mail finds you well

Body

Sincerely yours

Best regards

Regards

SATO Takehiro



SATO Takehiro

Nagoya University of Foreign Studies

Department of English and Contemporary Society



まずモデルを提示して、身近で起こったことを英文メールにして実際送信するというを行った。はじめはとても荒い英文の状態なので、文法的な間違いや語彙・表現などの添削を行い授業内で指導しながら返却し、その添削をもとに2回ほど追加・修正したものを英文メールとして送信提出させ、最終版を評価対象とする指導を行った。この時点での評価はまだそれほど細かく評価せず、形成的評価を視野においた評価とした。

導入・英文を書くこと・英文メール指導を前半（第1回～7回）で終えた後、後半に少し時事英語の要素を入れることとした。時事英語には英字新聞、英語ニュースなどがあり、それらの配信元も米国、英国をはじめカナダ、オーストラリアなど現在ではインターネットを利用すれば多様な時事英語が入手できる状況である中、本授業ではNHKが配信する英語語ラジオニュースを利用した。NHKの英語ラジオニュースの英語学習利用は現代英語学科の木村友保先生による実践が本学部でも以前から行われており、ビジネス学科の学生にも今まで『現代英語クロニクル』（木村、2015）が配付されていたりし

て周知の教材ともなっている。

毎日2回ラジオでも放送されているNHK英語ニュースの SCRIPT は Web 上で入手できるためこの Core English ではそれを利用して時事英語になれるライティング課題を後半で行った。それは Web で入手した 100 words 前後の英語ニュースを毎回課題として与え、翌週までに半分～3分の1を目標に要約してくる課題である（授業ではサマライズライティングと呼んで指導していた）。

具体的にある回の指導を以下に取り上げたい。

この回は COP における気候変動会議を話題にしたニュースになっている。

News

On Monday delegates from some 190 countries and territories kicked off talks on rules to implement the accord. The agreement, which took effect in last November, calls for all countries to set targets to cut their greenhouse gas emissions.

The US has sent a team to the meeting, but it's unclear how long the world's second largest emitter will remain engaged in the negotiations.

US President Donald Trump signed an executive order to overhaul measures for tackling climate change that were introduced by his predecessor, Barack Obama. Trump has signaled that he will soon decide whether to pull his country out of the Paris Agreement. (105 words)

はじめにこの英語ニュースの導入として実際の英語ニュースのヘッドラインを5回ほど流してディクテーションさせる。それが良いウォームアップとなり、ニュース自体やそこで使われている単語やフレーズにも意識が向けられる。その後そのディクテーションの解答と英語ニュースの背景を説明して、要約を英語でやってくるのは宿題とする。翌週要約した英文を学生隣同士でピアチェックをさせ、最終的に提出させる。この提出した英語要約は添削し、翌週返却するというサイクルでこの授業の後半（第8週～15週）は行った。この後半の添削においては細分化して毎回評価（A+、A、A-、B+、B、B-、

C) を行い、最終的に期末総合的に評価するときの大きなウェートを占めることとした。後半では4~5つぐらいのニュース英文を課題として、毎回の英語による要約文を評価の対象とした。

おわりに

以上CELPの全学共通英語プログラムがどのような経緯を経て現代国際学部の英語教育プログラムに導入されたか、さらにCELPの中のCore Englishを取り上げ、Core English授業群の各コースにどのような目標があるかを取り上げた後、一例としてWriting for Core Englishの授業を紹介した。途中で触れたように外国語大学としての英語プログラムの必要性、そして異なる3学科を要する現代国際学部の英語教育目標を有機的かつ生産的にカリキュラムとして実現する形で現在英語教育が行われている。Listening Comprehensionに関してCALL教材を現代国際学部でどのように扱うかということがまだ今後の課題として残されているが、一方現カリキュラムで運営されている学部共通の英語プログラムの精度を高めていかなければならない。多くの課題を認識しつつも、学生の英語力をチームとして取り組んでいくことは生産的でもあり、教育としての醍醐味を感じ、これからも積極的に運営にあたっていきたいと考える。

参考文献

- 木村博是, 木村友保 & 氏木道人(編). (2010). 『リーディングとライティングの理論と実践: 英語を主体的に「読む」・「書く」』. 東京: 大修館書店.
- 木村友保. (2015). *A Chronicle of Contemporary English Words & Phrases in Use 2015*. 名古屋: 名古屋外国語大学現代国際学部国際ビジネス学科.
- Long, M. (1991). Focus on form: A design feature in language teaching methodology. In K. de Bot, R. Ginsberg, & C. Kramsch (Eds.), *Foreign language research in cross-cultural perspective* (pp. 39–52). Amsterdam: John Benjamin.
- Lantolf, J. P. (2000). *Sociocultural theory and second language learning*. New York: Oxford University Press.
- Oller, J. W., Jr. (1983). Some working ideas for language teaching. In J. Oller & P. Richard-Amato (Eds.), *Methods that work: A smorgasbord of ideas for language teachers*. Rowly, MA: Newsbury House.

佐藤雄大. (2014). 『対話を用いた英語ライティング指導：ダイアローグ・ジャーナル・ライティングで学習者をサポートできること』. 広島：溪水社.

Vygotsky, L. S. (1987). *Thinking and Speech* (R. W. Rieber & A. S. Carton, Trans.). New York: Plenum Press.

Wood, D., Bruner, J., & Ross, G. (1976). The Roll of Tutoring in Problem Solving. *Journal of Psychology and Psychiatry*, 17(2), 89–100.